

明治5年(1872)広島県福山町に生まれる。第三高等中学を経て、明治30年(1897)東京帝国大学工科大学造家学科を卒業、大学院に学ぶ。明治32年(1900)東大助教授となり、第1回の外遊後、明治36年(1903)京都高等工芸学校図案科主任となり大正7年(1918)まで勤務。その後、名古屋高等工業学校々長を経て、大正8年(1919)京都帝国大学工学部建築工学科創立委員(後教授)となり、昭和7年(1932)の定年まで教授職にあった。

この間、都市計画名古屋地方委員会委員 大阪市都市計画調査委員、京都市都市計画事業顧問等を歴任、その他、街路証明の調査委員等も委嘱された。

各都市において多方面な活動を行い、橋梁、地下鉄道、モニュメント、ストリートファニチャー等の意匠(デザイン)色彩、景観等について、都市計画上の新境地を開拓した。門下生からも図案家出身の建築家、三崎弥三郎、吉武東里、永山美樹、および建築科出身で土木技術者として活躍した元良勲、増田誠一、等の異色ある人材が出ている。

彼は当時欧米で行われていた、新建築様式の紹介とその導入に力を入れたが、数回の外遊の後には、近代様式についても理解を示すようになった。彼の都市美に対する一貫した見解は、「建造物それ自身の美を追求すること

よりも、周辺の環境、それも建築物等の一時的なものでなく、それを取りまく場所の自然との調和、融合、いわゆる気分とでもいうべきのを重視し、形態、色彩等に反映、考慮すべきである。」ということにあった。特に橋梁に対しては、その(建築物に比して)寿命



の長い事から、これを都市景観の中心に置くことを主張したのは建築家として興味ある見解といわねばならない。

彼が各都市の都市計画に対して行った活動の具体的事例については、大阪市の多数の橋梁の景観を考慮したデザインと色彩計画、地下鉄の色彩計画等が著名であり、その中には当時同市技師であった子息英吉氏が設計し、彼が意匠を行ったものも含まれている(ちなみに彼の長男は、名市長とうたわれた関一の次女と結婚している)。その他の都市においても、種々特色ある作品を残したが、時代的な問題もあり、一貫したコンパウンドを与える機会が無かったことは惜まれる。

定年退職後も法隆寺保存工事事務所長をつとめるかわら、各種委員等を委嘱されたが、法隆寺で発病、昭和13年(1938)死去。享年66才。